令 和 5 年 度　 学 校 総 合 評 価

6　今年度の重点目標に対する総合評価

学校の現状と課題から次の３点を重点課題とした。

（1）授業力向上のための取組の推進＜学習活動＞

（2）生徒の自主的・実践的な態度の育成＜学校生活＞

（3）就労支援のセンター校としての機能の向上＜その他(教育相談)＞

＜学習活動＞

・教科部会を中心にＩＣＴを活用した授業を互見する機会を設けて授業研究を実施するとともに、教員間で「授業改善シート」を活用し、改善点等を共有して授業改善に取り組んだ。互見授業の機会を持てなかった教員の授業改善の取組は教科部会での共有にとどまり、全体で共有できなかったことからＢ評価とした。

＜学校生活＞

・取組１年目であり、教職員の支援を要する取組もあったが、生徒の意見を引き出し、実践につながるようにした。「ワンダフル☆School」を目指した様々な意識が芽生え、次のプロジェクトを計画するために自ら教職員に取組の相談をする生徒もいた。目標には届かなかったが、主体的な取組の意識付けを図ることができたことからＢ評価とした。

＜その他（教育相談）＞

・今年度、初めて「学校説明会（高等学校向け)」を実施し、高等学校に在籍する障害のある生徒や発達に特性のある生徒の支援に役立つ情報を高等学校の教員に提供するなど、就労支援のセンター校としての役割を果たす取組ができたことからＡ評価とした。

学校評議員会では、学校運営やアクションプランの取組状況について、専門的な立場からのご意見や感想をいただくとともに、今後を見据えた建設的な方策について助言をいただいた。

7　次年度へ向けての課題と方策

本校は、「卒業後の就職を目指す意欲の高い生徒の確保」、「卒業予定者全員の一般企業等への就職と職場定着」を重要な役割としており、昨年度から「健全な自立生活を送るための基盤の育成」として、これからの生徒の学びを支え、情報社会で適正に行動できるようにＩＣＴの活用力を高めること、そして、そのために教員のＩＣＴを活用した指導力の向上に取り組んできた。また、今年度は、就労支援の取組を中心に、学校生活の中で「自分で考えて行動できる生徒」を育成することを目指し、社会生活、就業生活に向けて必要な知識とスキルを高める取組の充実を図った。

今年度の成果と課題を踏まえ、今後も学校評議員、保護者、地域、関係機関と連携して学校の在り方や教育活動の課題等について解決を図り、本校の強みを生かしながら、一層充実した教育活動を推進することによって、生徒の自己実現と社会参加を促進し、社会に貢献できる人材の育成を進めていきたい。

＜学習活動＞

・授業などでＩＣＴを活用することが増え、生徒も、教職員ともにＩＣＴの活用能力は向上している。生徒がより意欲的に取り組むための手立てとして、ＩＣＴを活用する取組もなされているが、さらに「主体的・対話的で深い学び」の観点でのＩＣＴの活用方法について、引き続き研究、改善を進めていく必要がある。

＜学校生活＞

・「目指せ！ワンダフル☆School」の取組は、社会で求められる「自ら考え、発信する力」を養う上で有効であるとの意見をいただいた。今後も生徒が自発的に取り組める方策を検討し、継続して実施する。

・教職員間で生徒の主体的な態度の育成について共通理解を図るとともに、学校生活全体を通して生徒自らの気付き、実践を引き出すように工夫し、生徒が主体的に考え、行動できる校風を育む取組を進める。

＜その他（教育相談）＞

・今後も引き続き、本校の「就労支援のセンター校」という役割を果たせるようセンター的機能を周知し、活用してもらうための手立てを考えていく必要がある。

・高等学校のニーズや進路指導の在り方、在籍する生徒の進路状況など、情報が不足している部分も多いため、今後も継続して学校説明会を実施する。

・地域のセンター校とも相談情報の共有や連携を積極的に行う。

8　学校アクションプラン

<table>
<tr><th colspan="3">令和５年度アクションプラン　―1―</th></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">学習活動</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">授業力向上のための取組の推進</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・本校の生徒の特性として、学習の取組や習得に時間が掛かったり、説明や課題、発問内容の理解及びイメージがしにくかったり、学習が定着しづらかったりといった学習上の困難があり、授業では受け身になりがちである。
・１人１台タブレット端末の配備でＩＣＴ環境が整い、生徒が各学習活動でＩＣＴを活用して考え、生徒同士で意欲的に学ぶ場面が多くみられるようになった。
・ＩＣＴを活用した学習により、本校が実習を重視して積み上げてきた働く力に加え、情報社会において情報を選択・活用し、適正に判断して行動できる力の向上が期待できる。ただ、教師のＩＣＴを活用する取組は進んだものの、依然として生徒の主体的で対話的な学びを促す授業力の向上が望まれる。互見授業及び授業研究の機会を設け、授業改善に向けた取組が必要である。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>①互見授業による授業研究の実施</td><td>②ＩＣＴを活用した授業改善の取組報告</td></tr>
<tr><td>２回以上</td><td>全教員１回以上</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・互見授業及び授業研究、教科部会ごとの事前・事後研究を年間２回実施する。
・生徒の情報活用能力を目指し、全教員がＩＣＴを活用した授業改善を実施し、取組の成果報告での情報共有を通して授業力の向上を図る。
・外部講師を活用した研修会等を通して、生徒の情報活用能力を高めるための教師の授業力の向上を図る。
・ＩＣＴ教育推進委員会の機能の充実を図り、ＩＣＴ教育の環境整備を進めるとともに、学年や分掌と協力して情報モラルの向上を図る等、ＩＣＴを安全に使用できる環境づくりを進める。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>・授業研究（互見）
教科部会ごと　２回以上実施
※全９部会
（１学期：５回、２学期：９回）
合計 14 回</td><td>・授業研究を反映した授業改善を約７割の教員が行った。
・授業改善シートを作成し、共有した。
・教科部会で、ＩＣＴを活用した授業改善の取組の報告を行った。</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・校内研修会を９回行った。その他、外部講師を招いた研修会を５回行った。
・１学期と２学期に、各教科で合わせて 14 の授業を公開し、互見した。授業の公開に当たっては、各教科部会で、公開授業の前と後に授業研究を行った。担当教科以外の教員も授業を見学し、良い点、改善点などの意見を事後の授業研究で出し合った。
・授業概要シートを作成した。教科部会での授業研究を経て、授業評価、授業改善を行った後、取組を授業改善シートにまとめ、教職員間で共有した。
・Google Classroom に全教員をメンバーとした「研修」のクラスを作り、教科ごとに授業概要シート、授業改善シートや教材などを保存し、自由に教職員間で共有できるようにした。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td>・教科部会を中心に、ＩＣＴを活用した授業を互見し、授業改善を行った。ＩＣＴをより効果的に活用し､生徒がより意欲的に取り組める授業に改善できていった。
・授業改善については、改善点等を「授業改善シート」にまとめ、共有できるようにした。互見授業を行わなかった教員の授業改善の取組は、教科部会での報告にとどめ、全体では共有しなかった。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="2">・教師のＩＣＴ活用能力を高めるとともに、生徒がＩＣＴを活用して意欲的に学べる環境づくりをするという目標に向け、よい取組を重ねた。
・高等部を卒業しても学び続ける生徒を育てることを目指し、取組を継続してほしい。その際、生涯教育という視点で、生徒の学校生活や家庭生活での学びや楽しむ態度が育まれていることを学校、家庭で共有しながら進めるとよい。
・企業でもＩＣＴを活用したアンケート結果から議論を進め、職場環境の改善に取り組むことがある。ＩＣＴを活用する力や対話を通して主体的に課題の改善を考える力を育む取組は大切だと思う。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・授業などでＩＣＴを活用することが増え、生徒、教職員ともにＩＣＴの活用能力は向上してきた。また、生徒がより意欲的に取り組むための手立てとして、ＩＣＴを活用する取組もなされているが、さらに「主体的・対話的で深い学び」の観点でのＩＣＴの活用について、引き続き研究、改善を進めていく必要がある。</td></tr>
</table>

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）

<table>
<tr><th colspan="3">令和５年度アクションプラン　―２―</th></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">学校生活</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">生徒の自主的・実践的な態度の育成</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・生徒会活動を中心に、生徒自身が学校をよりよくする活動を推進しているが、明確に自分の考えを伝えたり、他者の考えを基に、より建設的な考えに発展させたり、主体的に他者と協力して活動に取り組んだりする生徒は多くない。
・集団や社会の一員として、よりよい生活や良好な人間関係を築こうとする自主的・実践的な態度を育成する機会や方法を検討する必要がある。
・コロナ禍で十分に地域活動に参加できず、生徒の地域活動への参加意識は低い。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>①学校行事や生徒会・委員会活動、その他の活動で、学校生活をよりよく、楽しくする取組や企画を提案し、実践</td><td>②積極的に社会参加の意識を高め、社会貢献できる地域活動や交流を深める活動等への参加の機会等の増加</td></tr>
<tr><td>・全生徒が各学期１件以上、提案
・全生徒が各学期１件以上、自分の提案または他者の提案に賛同して実践</td><td>・全生徒が各学期１件以上、提案
・全生徒が各学期１件以上、自分の提案または他者の提案に賛同して実践</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・生徒が協働して取り組む行事（体育大会、文化祭等）の企画や運営に主体的に取り組める環境づくりを進める。
・社会自立への主体的な態度を養い、よりよく生きる力を高めるように、ウェルビーイングの視点で学校をよりよくするアイデアや社会参加・社会貢献の機会を設定する。
・地域行事への参加や地域の方々と触れ合う機会を利用して、生徒が主体的に地域交流を深める活動等を提案する機会を積極的に設けて実践する。
・積極的に地域に開かれた学校としての推進を図ることで生徒の実践の場を広げるとともに、広く地域の方々に学校行事等の地域との交流の機会等も含めた情報を発信する。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>プロジェクトシート提出数　５６件
実践生徒数　延べ　２１０名
生徒一人当たりの実践数　３．８件</td><td>プロジェクトシート提出数　７件
実践生徒数　延べ　３５名
生徒一人当たりの実践数　０．６件</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・委員会活動中心に取り組んできた「目指せ！ワンダフル☆School」の活動を発展させ、個人または仲間と一緒に、学校生活のいろいろな場面で、アイデアを出して取り組むというプロジェクトを１学期末に生徒に提案し、取組をスタートさせた。
・自分で考えた企画をプロジェクトシートに記入し、生徒玄関に掲示した。また、活動後に感想を記入し、教員等からコメントをもらった。全校生徒にこの取組を周知するために、広報委員会がお昼の放送でいくつかのプロジェクトを紹介した。
・２学期末に「報告会」を行い、全校生徒の前で３組の生徒がプロジェクトを発表した。校長から講評をもらい、次の活動へのモチベーションにつながるようにした。
・初めての取組であり、自分からアイデアを出すのが難しい生徒もいたが、学級や作業学習、生徒会の企画に賛同して、一緒に実践できた生徒も多かった。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>B</td><td>取組１年目であり、教職員の支援を要する取組もあったが、生徒と話をし、意見を引き出し、実践につながるようにした。「ワンダフル☆School」を目指して、マナーアップや自分アップに向けて取り組もうという意識が芽生え、次のプロジェクトを計画するために自ら教職員に相談する生徒もいた。各学期一人当たり１件以上という目標には届かなかったが、主体的な取組について意識付けを図ることはできた。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="2">・生徒が自分たちで学校生活をより良くしようとする取組はすごい。自らアイデアを発信して、課題解決に取り組むという経験を今のうちに積んでおくと、社会に出てからも、会社が行っている業務改善の取組に参加できる力が育つと思う。
・「賛同者募集」という、自分から取り組むことが苦手な生徒への誘いが良い。
・他者の評価や取組の成果のフィードバックから、次にどのような取組ができるかという生徒の発想を膨らませながら、自ら学校や社会をより良くするアイデアを考えたり、他者の様子を見て感じたことを基に行動したりする力を継続して育んでほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・「目指せ！ワンダフル☆School」の取組は、社会で求められる「自ら考え、発信する力」を養う上で有効であるとのご意見をいただいた。今年度の成果を基に、今後も生徒が自発的に取り組める方策を検討し、継続して実施する。
・教職員間で生徒の主体的な態度の育成について共通理解を図るとともに、学校生活全体を通して生徒自らの気付き、実践を引き出すように工夫し、生徒が主体的に考え、行動できる校風を育む取組を進める。</td></tr>
</table>

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）

<table>
<tr><td colspan="3">令和５年度アクションプラン　―３―</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="2">その他（教育相談）</td></tr>
<tr><td>重点課題</td><td colspan="2">就労支援のセンター校としての機能の向上</td></tr>
<tr><td>現　　状</td><td colspan="2">・県東部の高等学校に在籍する障害のある生徒の就労に関する相談の実績はほとんどない状況である。しかし、障害のある生徒が在籍する高等学校等から学習支援、生活支援に関する相談や本校の概要についての問合せは、年に数件ある。
・現在、小学校、中学校、事業所対象の学校見学会等の教育相談の機会は設けているが、高等学校に在籍する障害のある生徒の就労に向けた教育相談の機会は設定していない。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達成目標</td><td>①高等学校向け学校見学会の実施に向けた周知等の工夫</td><td>②県東部の高等学校の教職員及び保護者対象の学校見学会の実施</td></tr>
<tr><td>学校案内、ＨＰ等を活用した周知</td><td>１回</td></tr>
<tr><td>方　　策</td><td colspan="2">・県東部の高等学校の教職員及び保護者向けの学校見学会の実施により、高等学校に在籍する障害のある生徒の就労に向けた指導、支援について情報提供や個別相談の機会を設ける。
・対象となる生徒の教育相談を通して、高等学校に在籍する障害のある生徒の就労に向けた適切な進路指導の一助となるよう、情報提供をする。</td></tr>
<tr><td>達 成 度</td><td>・センター的機能の周知を促すプリントの作成
・本校ＨＰへの掲載
・県東部の県立、私立高校及び特別支援学校に配付</td><td>・高等学校の教職員及び保護者向け学校説明会１回実施(7/13)</td></tr>
<tr><td>具体的な取組状況</td><td colspan="2">・本校の「センター的機能」について分かりやすく記載したプリントを作成し、ＨＰにも掲載した。
・７月 13 日(木)に高等学校の教職員及び保護者を対象とした「学校説明会(高等学校)」の実施を計画し、その案内を富山地区校長会にて 30 部配付するとともに、新川地区の高校 10 校及び私立高校６校にも送付した。
・学校説明会には６校８名の教員が参加し、本校の作業学習の参観と施設見学の後、本校の概要や進路支援について説明した。
・参加者には、作業学習や就業体験を含めた本校の進路支援の特徴や障害者雇用について理解を深めていただくとともに、学校生活に必要な自己理解の大切さについても知っていただけたのではないかと思われる。</td></tr>
<tr><td>評　　価</td><td>A</td><td>「学校説明会（高等学校）」を今年度初めて実施することができた。高等学校に在籍する障害のある生徒たちや発達に特性のある生徒たちの支援に少しでも役立ててもらえる情報を提供できたのではないかと考える。</td></tr>
<tr><td>学校評議員の意見</td><td colspan="2">・就業・生活支援センターには、就労先で適切な支援が得られずに困っている 18 歳以上の方の相談がある。取組は、一般高校の教員や生徒と就労や生活支援のスキルの共有という点で、障害者支援の全体の底上げにつながり、とても有効だと思う。
・近年、法定雇用率が上がっていて、大企業では、雇用者数が多い。小学校や中学校の早い段階から就労への意識を高めてもらい、生活習慣や仕事能力の高い生徒を雇用したいと考えている。この取組を含め、今後も小・中・高校の各段階で適切に就労に関する学びを積み上げられるように就労支援のセンター校の機能を高めてほしい。
・学校の見学だけではなく、今後も活用できる多くの資料を提供しているのが良い点である。現在の各学校の現状から、中・高校への情報の発信が必要だと感じている。特に現状では高校３年生の進路先に困っているという相談が多いため、今後も生徒、保護者、教員への情報の発信を継続してほしい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ向けての課題</td><td colspan="2">・今後も引き続き、本校の「就労支援のセンター校」という役割を果たせるようセンター的機能を周知し、活用してもらうための手立てを考えていく必要がある。
・高等学校のニーズや進路指導の在り方、在籍する生徒の進路状況など、情報が不足している部分も多いため、今後も継続して学校説明会を実施する。
・地域のセンター校とも相談情報の共有や連携を積極的に行う。</td></tr>
</table>

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）